

## 「お茶碗」考 江戸における量産陶磁器の変遷

A Study of "Tea Bowls": Some Consideration about the Transition of Mass-produced Porcelain Bowls Excavated from the Sites of the Edo Period

長佐古真也

①見過ごされてきた器

②考古資料にみる「お茶碗」の変遷

③考古資料からみた日常喫茶の普及

④四つの展望

### 【論文要旨】

私たち日本人は、日常、飯を食べるための碗を「お茶碗」(tea-bowl)と呼び習わしているにも拘わらず、こうした習慣が、どのような理由で、いつから行われていたのかについては、必ずしも明らかではない。日常食器をめぐるのは、他にもいくつかの疑問があるが、「やきもの文化」を語る上で、これら日常に深く浸透している器を捨象する訳にはいかないであろう。

こうした問題については、民俗や文献史学の分野でも言及されてきた。しかし、時系列上で詳細に把握できるだけの資料を欠いていたため、具体的な様相を提示するに至っていない。これに対し、考古遺物は、各時期毎に、組成の量的変化まで復元することが可能なため、前出資料の空隙を埋めることのできる一級の史料である。

例えば、明治時代中期の出土事例をみると、現代と同様のやきものの飯碗・湯のみ碗を主体とする組み合わせが既に成立している。しかし、江戸時代前期の碗をみると、飯・汁ともに漆器碗が占めている。そして、やきものの碗は、大ぶりの陶器碗が主体であること、伝世の「茶碗」との類似性、さらには内面に残る擦痕などから喫茶碗と推定される。また、陶器の喫茶碗は江戸時代中期頃を境に、小形化の傾向を示し、日常の喫茶が「点てる茶」から「点でない茶」に変化していったことを窺い知ることができる。

すなわち、こうした流れを概観するだけでも、従前の解釈とは異なる喫茶習慣のあり方や、肥前磁器の生産・流通のあり方といった問題に言及することが可能である。今後は、より正確な様相の把握を通して、「米」や「やきもの」に対する思いを軸にした「日本人」の心意の特質、東アジアの中での日本の位置付け、日本の内部による文化の地域的様相などの復元に向かうべきである。